目次
2面 新人特集
3面 春の結果 国際テニストーナメント
4面 バスツアー・スポデーなど

女子ハンドボール部 筑スポ 3季ぶり!!

王座返り咲き

昨年の関東学生春季リーグでは、一次リーグを全勝で突破しながらも、二次リーグでは得失点差で涙を呑む結果となった本学女子ハンドボール部。昨季は春の流れを断ち切れぬまま、秋季リーグ、そしてインカレでも優勝の座を逃してしまった。

しかし今年の春季リーグは、一次リーグ・二次リーグを通して筑波に勝利できたチームはゼロ。まさに本学女子ハンドボール部の「独壇場」となった。

一次リーグは昨年同様全勝で終えた。二次リーグも順調に勝利を重ね、迎えた最終戦は一次リーグで26・23で勝利を収めている日本体育大学(以下日体大)との一戦となった。筑波は高さのあるオフェンスを活かし、得点を重ねる。2点をリードして前半を終えた。しかし日体大の速いパス回しからディフェンスが崩され、徐々に日体大に追いつかれる展開となり、22分の時点では日体大に2点差をつけられてしまう。だがこのままで終わらないのが今年の筑波大。そこから追い上げを見せ、最終的には3点差をつけて勝利。最後に底力を見せ、見事3季ぶり25回目の優勝を飾った。

今年はJOC強化指定選手が1名、年齢別指定選手も8名在籍する本学女子ハンドボール部。昨年からチームの主軸として戦う選手も多く、実力・経験ともに充実している。昨季の雪辱を果たすためには、最高のスタートを切ったのではないだろうか。秋季リーグ、そしてインカレと、彼女たちの今年の快進撃はまだまだ続きそうである。

2010年 関東学生ハンドボール春季リーグ

女子1部　一次リーグ

	筑波大	日体大	東女体	国士舘	日女体	東海大	早稲田大	茨城大	勝分敗
1 筑波大		26○23	30○21	21○18	29○12	33○20	39○14	31○8	7-0-0
2 日体大	23●26		20○17	26○20	35○30	24○22	32○28	20△20	5-1-1
3 東女体	21●30	17●20		16△16	23△23	22○21	34○28	23○15	3-2-2
4 国士舘	18●21	20●26	16△16		24●25	27○19	26○18	29○20	3-1-3
5 日女体	12●29	30●35	23△23	25○24		20●22	31△31	37○24	2-2-3
6 東海大	20●33	22●24	21●22	19●27	22○20		19○17	27○20	3-0-4
7 早稲田大	14●39	28●32	21●34	18●26	31△31	17●19		22△22	0-2-5
8 茨城大	8●31	20△20	15●23	20●29	24●37	20●27	22△22		0-2-5

最終順位

優勝　筑波大学
3季ぶり25回目の優勝
2位　日本体育大学
3位　東京女子体育大学
4位　国士舘大学
5位　東海大学
6位　早稲田大学
7位　日本女子体育大学
8位　茨城大学

最優秀選手賞　作内　杏那(体育4年)

優秀選手賞　石野　実加子(体育4年)
青木　めぐみ(体育4年)
山野　由美子(体育4年)
中西　朋世(体育3年)

最優秀選手賞受賞 作内選手インタビュー

作内杏那選手(体育4年)

―春季リーグの全勝優勝という結果、これは戦前から意識していましたか?

「全勝はもともと目標としていました。リーグ戦は絶対優勝するつもりだったので、達成できて安心しています。」

―昨年の悔しさの影響はありましたか?

「やはり昨年は1年間優勝を逃し続けたので、その分も優勝したいという気持ちは強くありました。」

―チーム内で昨年と変わった点はありますか?

「メンバーは昨年から中心を担ってきた選手ばかりです。しかし3年生ということもあり、まだまだ甘い部分があったのかなと思います。今年は最上級生の自覚も生まれ、全体的に強くなれたと思います。」

―チームとしては優勝が目標とありましたが、個人としての目標はありましたか?

「自分は波のある選手なので、いかにそれを無くすかを課題として臨みました。また筑波のプレースタイル『DFをしっかりしてOFに繋げる』中で、DFリーダーを任されている自分の役目は重要。悪いリズムを良く変化させるプレー・雰囲気作りを意識しました。」

―試合での反省点はありますか?

「決勝リーグで、自分たちのペースで試合を展開し続けることが出来なかったことですかね。気を抜いたわけではなかったのですが、危ない試合が多くなってしまいました。」

―逆に良かった点は?

「初戦前日にキャプテンが怪我をしてしまい、ベストメンバーでは臨めない状況でした。そんな中勝利し、復帰したキャプテンの調子とともに徐々にチームもペースアップできたところです。」

―最優秀選手賞を受賞した感想は?

「賞には全然こだわりはなくて。たまたま獲れたって感じです(笑)。チームのみんなが自分にパスを回してくれて、それを自分が決めただけです。みんながくれた賞ですね。」

―今後のチームの目標は?

「1ゲーム60分間、しっかり戦えるように体力&精神力双方を強化していくことです。そしてもちろんインカレ優勝!」

―個人としての目標は?

「自分に求められているものを100%に近く出していくことです。100%出し切ることは難しいかもしれないですが、それに限りなく近づけることはできると思います。」

―活躍必至の本学女子ハンドボール部。今後どこに注目してほしいですか?

「伝統あるチームプレー!更に魅力的なものになるように、押し出していきたいです!」(斉藤千絵)

筑波スポーツ
平成22年6月24日(木)
第139号
題字:中山雅史氏
蹴球部OB

期待の新人!

硬式野球部

「全国制覇」が部の目標である硬式野球部に、今年も全国からたくさんの新入生が入部した。その中でも今回は2人のルーキーを紹介したい。

甲子園の常連校、報徳学園高校(兵庫)出身、〝報徳のサウスポー〟と呼ばれた投手、宮谷陽介選手(体育1年)と、昨年春のセンバツの覇者、清峰高校(長崎)のエースを支えた捕手、川本真也選手(体育1年)だ。

宮谷選手は、近所の野球チームの監督に誘われ、野球を始めた。やがて、甲子園の常連校である報徳学園へと入学。多彩な変化球を活かし、多くのバッターを仕留めてきた。

報徳のエースとして、やはりプレッシャーはあったようだ。そのプレッシャーに打ち勝つために、宮谷選手はフェアグラウンドに入る際、必ず左足から入っていたという。マウンドに立つ彼を支えるこのおまじないは、今も続けているそうだ。

川本選手は、仲の良かった幼馴染の兄に誘われ、野球を始めた。毎日の厳しい練習を「思い出」と語る川本選手。高校時代の川本選手の活躍はある1人の少年に夢と希望を与えた。

その少年は川本選手と同姓同名であるが、「ペルテス病」という病を抱えていた。

ある日、テレビで甲子園を見ていた川本君は、偶然同姓同名の川本選手を見つける。川本君は、テレビに映る川本選手に憧れ、車いすのままキャッチボールを始めた。また、実際に球場へ行き、川本選手を応援しに行くこともあった。いつしか2人は手紙のやり取りをするようになり、キャッチボールも一緒にしたそうだ。その時川本君は川本選手に「甲子園に出たい」と、夢を語った。

両選手の出会いは、昨年春のセンバツである。準決勝で両校は奮闘。結果は清峰が4-1で報徳を破り去り、決勝へと駒を進めた。

お互い敵同士だった2人が、今では同じグラウンドで共に汗を流している。まさか大学で再び出会うとは、誰が予測できただろうか。「噂には聞いていたが、本当にそうだとは思わなかった」と話す宮谷選手。そんな2人にお互いの印象について尋ねると、「(川本君は)清峰だから真面目できっちりした人かと思ったら、けっこうチャライ!」と話す宮谷選手。対する川本選手は「報徳は伝統校だし、きちっとしている。(宮谷君は)イメージ通り!」と話す。すると宮谷選手は「彼(川本選手)は野球に関しては真面目だけど…(笑)」とコメント。

取材中、2人は互いの発言に突っ込みを入れ、笑いあう。その様子を見ていると、本当に仲が良さそうだ。

硬式野球部のいいところについて2人に聞いてみた。「みんな真面目だし、練習に対する意識が高い」と話す宮谷選手。川本選手は「部の雰囲気が明るい。みんな一球一球に集中し、本番を意識して練習しているところがいい」と話してくれた。

恵まれた環境の中で日々練習をする両選手の将来の夢が気になる。「プロになりたい」と話すのは、巨人ファンの宮谷選手。巨人ファンと聞いて川本選手は「いや、阪神でしょ。巨人以外ならどこでもいい」と対立。そんな川本選手の将来の夢は「体育の先生」になることだそうだ。

取材の最後に、2人からメッセージを頂いた。

『野球部にもっと注目してほしい!!』

毎年、全国から有望な選手が集まる硬式野球部。今後の2人の活躍、そして野球部の活躍に、目が離せない。

(上杉織美)

蹴球部

今年の蹴球部にも強力な新人がやって来た。佐賀東高校で08、09年高校総体三位の立役者、U・18代表FWの赤崎秀平選手(体育1年)である。昨年度の高校NO1FWの呼び声も高い。

浦和レッズからのオファーもあった赤崎選手は、「プロになっても活躍しなければ意味がない」という思いのもと、4年後プロで活躍するために本学への入学を決めた。筑波大のサッカーが「ボールを大事にする、自分のしたいサッカー」であることも理由の一つであると語った。

赤崎選手のデビュー戦は関東リーグ前期第一節の駒澤大戦。3日前まで高校選抜の欧州遠征に参加していたため、「試合には出られないと思っていた」そうだ。出場時間は短く、得点はなかったものの、赤崎選手は「緊張はしなかった。早く点が取りたいと思った」と語った。

しかし、その後のリーグ戦では積極的にゴールを狙うものの、得点することはできなかった。FWとしての責任とチームメイトからの期待を感じる中、第六節早稲田大戦で初の得点を決めた時は「ほっとした」そうだ。また、続く慶応大戦では2得点の活躍をみせた。

赤崎選手は「一人一人のレベルが上がれば、チームとしてレベルの高いサッカーができる」と、大学でのサッカーへの期待も覗かせた。風間監督のFWの動きに対する丁寧な指導には、「自分のことを理解してくれる。今の練習は充実している」と話してくれた。

試合を重ね、高校と大学とのサッカーの質の違いを実感する一方、「自分の力が試合で通用している自信がある」と、しっかりとした口調で話す赤崎選手にとって、大学はプロで活躍するための布石。今からプロを意識している。特に同期の高卒プロとの差は気になるようだが、「彼らの活躍が刺激になる」とも語った。そして同じ蹴球部の1年生の活躍を間近で見ることも、「次は自分が」という相乗効果を生むそうだ。

今年「挑戦」を掲げる蹴球部だが、「自分が新しい環境でどこまでやれるか。プロ・大学のいろいろなチームと試合をしたい」と言う意気込みを見せる赤崎選手は、まず「リーグで二桁を得点する」ことを目標にするという。今年の蹴球部に新しい風を吹かせてくれるだろう。

(鵜川香奈子・有田和晃)

バレーボール部

今年の春、女子バレーボール部に身長178㎝到達点は294㎝の記録をもつ期待のルーキー池田智美選手(体育1年)が入学した。現在の女子バレーボール部の中でも一番の高身長だ。

彼女がバレーを始めたのは小学校6年時で、背の高さから友人に勧められたのがきっかけだという。中学から本格的に始め、高校の古川学園では主将も務めた。「主将としてチームを引っ張ることは難しく大変だったが、バレーの能力だけでなく個人的にも成長できた」と振り返る。しかし、高校時代は春の高校バレーの決勝で同じ相手に二年連続で負け「不完全燃焼なので、大学では一からがんばりたい」とバレーへの意気込みは強い。

大学では、高校より練習の量は減ったものの練習自体の中身は濃い。バレー一色だった高校時代に比べて部活以外の時間も増え、「大変だが勉強になる」と前向きだ。また、良いコンディションでプレーができるように、健康管理と練習後のケアを欠かさず行うそうだ。食事面でもできるだけ外食はせずに、栄養バランスに気を使い、自炊するよう心がけているという。

筑波大学のバレーボール部については「人数が少ないので一人ひとりの役割がコートの内外にかかわらずはっきりしている」と話す。先日行われた春季リーグ戦は、すでに池田選手もメンバーとして活躍していたが、チームは惜しくも準優勝に終わった。この結果について、「個人的にプレーの質が足りないということも含め、チームプレーとしても不完全だった。」という。一年生の自分にできることとして、声を出し、思いっきりプレーをすることでとにかくコートを明るくすることに努めているという。

大学での意気込は、バレーに打ち込み、まずは東日本インカレ制覇、そしてインカレを連覇することだと教えてくれた。「コートでは学年や立場は関係ないので勝利に貢献できる選手になりたい」という。今後もバレーボール部、そして池田選手の活躍から目が離せない。

(小島菜奈美・太田和幸子)

トライアスロン部

トライアスロン部に大型新人がやってきた。中学2年でトライアスロンを始め、日本ジュニア選手権3連覇、日本スプリント選手権優勝、そしてアジアジュニア選手権優勝という輝かしい成績を持つ椿浩平選手(体育1年)だ。

椿選手は今年に入ってすでに3戦をこなし、「世界一の選手が出場する戦いの中では、自分はまだまだ。だけど自分の武器になるものも見つかった」と大会を振り返った。

トライアスロンと椿選手の出会いは中学時代。幼いころから水泳をやっていたが、中学の陸上部にいた先輩に憧れてトライアスロンを始めたという。筑波を選んだ理由も「トライアスロンの練習の理論を学ぶため、体育をしっかり学んで練習に活かすため」と意識が高い。

平日の練習は外部コーチからのメニューをこなし、外部クラブでの練習のため金曜日の夜から土日にかけてはクラブ拠点での練習…と忙しい毎日を送っている模様。それでも「自炊は極力したい。たくさん食べない選手は強くなれない。友達と食材の買い物にも行きますよ」と自身の健康管理にも気を遣う。今年度改装された体芸食堂も彼の強い味方で「おかわり自由のご飯をいっぱい食べる」のだそうだ。

また、数々の世界大会の経験がある椿選手に、世界の舞台で感じることを聞いてみた。「日本チーム、特に男子はまだまだ世界とは戦えない。意識も基準も低い。スイム・バイク・ランの3種目すべてで単発でも戦えるぐらいのレベルにしたい」。自身については、「ラン10キロ全部はもたないが、入りの1キロは自分の武器。これは世界でも戦える。課題はスイムとバイク。でもバイクに必要な筋力は徐々についていくので焦りはない」と自信をのぞかせた。

そして、椿選手の今年の目標は「9月の世界選手権にエリート部門で出場すること」。エリート部門での出場は国内での高い評価が必要だという。さらに、「日本ジュニア選手権も自分にとっては最後の年になるので4連覇で締めくくる。将来的には再来年のロンドン五輪が最大の目標」と語った。彼の大きな瞳はすでに、世界、そしてロンドン五輪をまっすぐに見据えている。

(大庭夏海・斉藤千絵)

バドミントン部

関東大学バドミントン春季リーグ(以下関東リーグ)の二部で優勝し、一部昇格を決めたバドミントン部男子。躍進を続ける同部に新たな戦力が加わった。佐久間浩平選手(体育1年)だ。兄の影響で小学3年生から競技を始め、以来着実に力を伸ばしてきた。高校選抜2位(ダブルス)、全日本ジュニア5位(シングルス)など、優れた競技成績を持ち、ジュニアナショナルメンバーに選ばれたこともある。

先日の関東リーグにおいても3試合に出場し、勝利に貢献した。大学での初めての大会の感想を尋ねると、「大会の途中に肩を怪我してしまい思うように戦えなかった。要所で勝てた点は良かったが、秋季リーグでは至らなかった分を挽回したい。」と悔しさをにじませた。

今までも腰椎分離症や肉離れなど怪我には悩まされてきたという。関東リーグでも肩を痛め、療養を余儀なくされた。「高校時代から練習にブランクを開けてしまうことが多かった。だから今はフィジカル面をのばしたい」と変化を誓う。

変化と言えば、新生活をどう感じているのだろうか。「筑波大学はバドミントンの研究が進んでいるところが魅力。競技に対する考え方も科学的で学ぶことが多い」と、毎日が充実しているようだ。しかし一方で、「高校時代と比べて練習時間が格段に延びて、正直きつい。今まで実家暮らしだったので自炊も…。栄養を考えて作らなければだし、大変」と、まだまだ戸惑いもあるようだ。

北海道を出てつくばまでやってきた佐久間選手。何故、筑波大への入学を決めたのか。「先ほども挙げたが、どこよりもバドミントンの研究が進んでいると思ったから。中学生のときから体育教師になりたいと思っていたのも大きな理由の一つ」とのこと。

始まったばかりの大学生活。最後に意気込みを聞いた。「女子と比べて結果が出せていない男子を引っ張っていきたい。そしてインカレ優勝に導きたい。個人としてもインカレ優勝を目指す。世界で戦える選手になりたい」

はにかみつつインタビューに答えてくれた佐久間選手。しかし夢を語るとき、その瞳は真摯に未来を見つめる。彼と、彼の引っ張るバドミントン部男子の今後に期待だ。

(矢畑冴佳・本間詩織)

関東インカレ 女子18連覇

フィールド全種目制圧！

筑波大学陸上競技部にまた新たな歴史の1ページが刻まれた。5月15～16、22～23日に行われた関東学生陸上競技対校選手権大会（以下関東インカレ）において、平成2年以来続いていた女子1部校連覇の数字をまた一つ更新。見事18連覇を達成したのである。

チームを引っ張り、そして自らも優勝に大きく貢献した女子主将の蛭田伶菜選手（体育4年）は、チームの優勝について「私たちの代で連覇を途切れさせることはしたくなかった。優勝が決まった瞬間嬉しかったのもあるが、ホッとした」と語る。

蛭田選手の専門とする砲丸投は初日の決勝種目ということもあり、「いい形でチームに勢いを」との思いで臨んだという。結果は自己ベストを更新する投擲を見せて優勝。昨年に続く連覇を成し遂げた。「目標としていた15mには届かなかったが、優勝してチームに8点を、という最低限の結果は出せた」と蛭田選手は振り返る。

主将の優勝で勢いづいた筑波。皆落ち着いて競技に入れていた」というように、各選手がそれぞれ自分の力を出し、なんと21種目中10種目において筑波が優勝。特にフィールド種目は蛭田選手が優勝した砲丸投をはじめ、全種目で優勝するという大記録を打ち立てた。このフィールド種目での筑波の活躍が連覇の原動力であったことは言うまでもないだろう。

女子主将
蛭田伶菜選手（体育4年）

そしてもう一つ、優勝の要因として挙げられるのがルーキーの活躍である。入学して間もないこの時期にも関わらず、800mで大会新記録を出した真下まなみ選手（体育1年）をはじめ、4選手が個人優勝を飾ったのである。蛭田選手をして「夢の舞台で自分の力を抜群に発揮していた。本当に凄いし、頼もしい」と言わしめる素晴らしい活躍だった。

今回の関東インカレでは男子が惜しくも2位におわり、2年連続の男女総合優勝は成し遂げられなかった。9月の日本インカレではそれがチームの目標となる。「今度は9月に部員全員で宣揚歌を歌います！」という蛭田選手の思いは叶うのか。ぜひまたそのシーンを見せてほしい。

（有田和晃・斉藤千絵・小島菜奈美）

走幅跳で優勝した中野瞳選手（体育2年）

本学優勝選手（敬称略）

〈男子〉

【4×400mリレー】筑波大学（佐藤・田中・伊藤・安孫子）

【走高跳】戸邉直人（体育1年）

【三段跳】松下翔一（体育3年）

〈女子〉

【800m】真下まなみ（体育1年）

【4×100mリレー】筑波大学（中野・岡部・佐野・世古）

【走高跳】金井瞳（体育1年）

【棒高跳】榎本優子（体育1年）

【走幅跳】中野瞳（体育2年）

【三段跳】前田和香（体育2年）

【砲丸投】蛭田伶菜（体育4年）

【円盤投】髙橋亜弓（体育3年）

【ハンマー投】糸満みや（体育1年）

【やり投】宮本理陽子（体育4年）

800mで優勝した真下まなみ選手（体育1年）

バレーボール部 女子準優勝

男子1部昇格!!

前年度学生日本一に輝いた女子バレーボール部。今年度は関東リーグ2位という結果からのスタートとなった。

平成22年度春季関東大学バレーボールリーグ戦女子1部。大会序盤から雲行きは怪しかった。予選リーグ第1戦では、前季に2部から上がってきた国士舘大学にストレート負けを喫する。

2戦目からの残りの6試合は全勝し、予選リーグを1位で通過した。しかし、上位4校でのリーグ戦となる決勝リーグでも、不安を拭うことはできなかった。

予選4位の日本体育大学との決勝リーグ第1戦では、5セット目までもつれ込んだ接戦を落としてしまう。

さらに、続く東海大学との対戦は、25-18、25-14、25-8と惨敗した。試合序盤の崩れを立て直すことができなかった。

決勝リーグ最終戦の相手は、昨年度の全日本インカレ決勝で雌雄を決した嘉悦大学。決勝リーグに入ってからの不調の影響か、第1セットを落としてしまう。しかし、池田智美選手（体育1年）のレフトからのアタックによる連続ポイントなどで、徐々に調子を上げる筑波大が第2セットを奪う。

続く第3セットでも勢い衰えることなく、セット序盤には渡邉美穂選手（体育4年）のサーブが冴え渡る。その後も着実に得点を重ね、2セットを連取。第4セットを奪われるも、デュースに及んだ第5セットを18-16で制し、辛くも決勝リーグで1勝を挙げた。

成績は準優勝であったが、決して満足のいく結果ではないだろう。

次の公式戦は6月中旬の東日本インカレ。キャプテン渡邉選手を中心とした、より強固なチームづくりが求められている。

一方、男子は今季2部2位という結果に終わった。来季からのリーグ戦制度の改革により、男子バレー部は1部へ自動昇格する。

昨年度秋季の降格からワンシーズンでの返り咲き。2部降格で嘗めた辛酸をばねに、再び1部で頑張ってほしい。

（太田和幸子）

個人賞

平成22年度　春季関東大学バレーボールリーグ戦

女子1部

敢闘選手賞

渡邉美穂選手（体育4年）

同　男子2部

敢闘選手賞

椿山竜介選手（体育4年）

スパイク賞

椿山竜介選手

新人賞

出耒田敬選手（体育1年）

ベストオブサポート賞

筑波大学

国立大で初！国際大会

筑波大学国際テニストーナメント！

4月3日～11日、「第1回筑波大学国際テニストーナメント」が本学で開催された。

ウインブルトンや全米オープンといった世界のメジャートーナメントに出場するためには、国際大会に出場しポイントを獲得しなければならない。今回のように、国際テニス連盟（ITF）の公認する国際大会を国立大学が主催するのは初めてのことである。世界のメジャートーナメントの登竜門としての意味を持つのだが、また、本学大学院教授であり、硬式庭球部部長兼監督である山田幸雄教授が、今回大会実行委員長を務めた。

大会には国内のトップ選手や国外の若手選手が参加し、試合はシングルスが64名（本戦は32名）、ダブルスが16組の男子で行われた。本学からは竹中健矢（体育2年）や石井靖晃（体育2年）、藤田祥吾（体育3年）らが出場した。また、メインであるダブルス・シングルスの試合の他に、ブラインドテニスや、サービススピードを競う「速球王体験」、「速球王コンテスト」といったイベントも行われ、大会を盛り上げた。

この大会は多くの人に支えられている。中でも本学硬式庭球部の部員たちは、学生スタッフとして大会期間中の運営はもちろん、会場のセッティングやイベントの計画など、開催へ向けた準備にも多くの力を注いできた。また、大会Tシャツの作成・販売、試合の審判、外部取材への対応、ラジオ放送へのリポーター活動…など大会中も多くの仕事をこなし、今大会を成功に導いた。

今大会の模様は、朝日新聞や茨城新聞などに掲載され、ラジオつくばやACCSで放送されるなど、メディアにも取り上げられた。また大会を通して、選手を含め学生や高校生、市民など多くの参加者の交流があり、客席のにぎわいも見られた。

「テニスの街つくば」。国立大学初主催の国際大会は、そのアピールと共に成功を収めた。改修を終え、新しく桐の葉の入った筑波大学のテニスコートは、再び国際大会でにぎわうことを待ち望む。（本間詩織）

Gakusei Trainers Tsukuba

学生トレーナーサークル 2010年活動スタート!!

私達"Gattsu"は、主に月曜21:00～夜中までトレーナーの勉強会をしています!
将来トレーナーを志す人はもちろん、何部でもいいから大学の部活でトレーナーをしたいという人も大歓迎です!紹介します!!目指すは名実ともに日本一のトレーナー陣!!!!!

代表：硬式野球部ヘッドトレーナー神林（体育4年）kan-8065@ezweb.ne.jpまで!

結果一覧

【男子アイスホッケー部】

・関東国公立大学アイスホッケーリーグ

5／28筑波大○1-0●一橋大
6／4筑波大○5-0●横国大
6／11筑波大○2-1●首都大
5／12筑波大●1-5○東海大
●2-3○
5／8・9
筑波大○4-0●帝京大
○5×-4●
5／22・25・29
筑波大●2-3武蔵大
○4-2●
○7-3●
（7勝5敗で3位）

【弓道部】

関東学生弓道選手権春季トーナメント大会

男子1回戦
筑波大●11-13○横国大

女子決勝戦
筑波大○7（4）-7（3）●獨協大

【硬式野球部】

・首都大学野球春季リーグ戦

4／10・11
筑波大○5-3●城西大
○2-1●
4／24・25・26
筑波大○4-0●日体大
●1-4○
○3-0●

【蹴球部】

・関東大学サッカーリーグ戦

前期
4／11筑波大●0-2○駒澤大
4／17筑波大●0-2○明治大
4／24筑波大○1-0●流経大
4／28筑波大●0-2○神奈川大
5／4筑波大○2-1●中央大
5／9筑波大 1-1 早稲田大
5／15筑波大○5-1●慶應大
5／19筑波大○2-1●拓殖大
5／22筑波大 1-1 順天堂大
6／12筑波大 2-2 国士舘大

【水泳部】

競泳

・第86回日本選手権水泳競技大会

男子自由形50m／3位 小林拓矢
男子平泳ぎ100m／4位 若月哲也
女子背泳ぎ50m／7位 有田真紀

飛込

・室内選抜飛込み競技大会

男子3m飛板飛込
2位 岡本優／5位 小林数馬
男子高飛込
3位 岡本優／8位 大内嘉之
男子3mシンクロ
1位 岡本優・坂井丞（外部）
3位 小林和真・大内嘉之

【体操競技部】

・第44回東日本学生体操競技選手権大会

女子
団体総合／2位 筑波大学
個人総合／3位 江嶋とも実
5位 大久保奈美
7位 藤本亜由子
男子
団体総合／6位 筑波大学

【バドミントン部】

・関東大学バドミントン春季リーグ戦

男子2部／優勝 筑波大学
（入替戦の結果1部昇格）
女子1部／準優勝 筑波大学

【ライフセービング部】

・第23回全日本ライフセービング・プール競技選手権大会

個人女子200mスーパーライフセーバー／7位 上原絢子

硬式野球部 応援バスツアー

まだ肌寒さが残る4月下旬。選手たちの活躍を間近に見られる応援バスツアーが、平塚球場(神奈川県)にて行われた。「筑波スポーツ編集部からは4名が参加。取材用カメラとメモを持ち、バスへと乗り込む。その際、部員の方々から、手提げ袋に入ったお土産を頂いた。中には、今回のリーグ戦に参加するすべての大学と選手の名簿が載った公式パンフレットと、野球部が作った手作りのパンフレット、そして参加者もスタンドでしっかりと応援ができるようにと、応援歌がまとめられた紙が入っていた。

バスの中では、野球部に関する景品付きのクイズが用意され、参加者は大いに盛り上がった。そのほかにも、部員が試合前に見る「モチベーションビデオ」を特別に見せて頂いたり、全員で応援の練習もした。

好きな選手のサインボールやオリジナルストラップなど豪華景品が用意されたクイズに、参加者は選手たちの意外な一面を知ることができるということもあり、とても楽しんでいた。選手たちの日々の努力がぎゅっと詰まったモチベーションビデオは、周りから「わあ！」「かっこいい！」などの感嘆の声があがるほどの出来栄えであった。応援の練習では、選手の方々が身を張って演技をしてくれたり、宣揚歌（通称「桐の葉」）も歌った。私自身、宣揚歌は初めて歌ったので、どこか新鮮な気がした。

会場に着くと、一人一人にメガホンが手渡され、スタンドでは、参加者を囲むように選手が並び、参加者にとって応援しやすいフォーメーションとなった。

今回の相手は日本体育大学。昨年の秋季リーグ首位の東海大に次ぐ2位であり、筑波は3位だ。「合言葉は日体を〝ニっタテ〟」という日体に対する熱き思いと共に、負けられない試合が始まった。

先発は久保貴大選手（体育3年）。序盤から二死一・三塁のピンチを招くが、無失点でこのピンチを切り抜ける。

試合が動き出したのは、三回裏、筑波の攻撃。無死二・三塁のチャンスから酒井秀文選手（体育4年）が先制点となる犠牲フライを打つ。この後筑波は四回、五回と1点ずつ日体から奪い、七回には佐藤高広選手（体育4年）が4点目となる適時打を放つ。その後は、失点を許すことなく、4－0という白星をあげた。

試合終了後、選手と参加者が一緒に集合写真を撮るなど、選手と参加者が一体となることができた今回のバスツアー。バスから降りる際、「ありがとうございました」と部員の方々からお礼の挨拶とともに、行きのバスで見させていただいた、モチベーションビデオなどが収録されたDVDを頂いた。

あっという間の試合であったが、今回の試合は筑波にとって大きな収穫であっただろう。もし次回もバスツアーが開催されるなら、とても楽しみである。

白球を追いかける彼らの真摯なプレーを、みなさんもぜひ一度、見に来てはいかがだろうか。（上杉織美）

バスケットボール部 日筑定期戦

4月29日に東京代々木第二体育館で、日本体育大学との日筑定期戦が開催された。今大会は、2月に新チームとなってからの初の公式戦として、力を発揮できるか確認するという位置づけである。日筑戦の開幕により春のバスケットボールシーズンの訪れを実感する人も少なくないだろう。

今年は、毎年行われていたバスツアーがキャンセルされ、少し寂しい幕開けとなった。例年バスツアーはミニバスケットボールクラブに所属する子どもたち、その保護者などが参加し、バスケ部作成のビデオの上映や部員の紹介などを楽しんでいたので、今年もバスツアーを楽しみにしていた多くのファンたちはがっかりしただろう。

本戦の前に行われたBチームの試合であるJunior Varsity Gameの結果は、女子が89－65で勝利し、男子は51－57で惜しくも敗れた。

そしていよいよAチームの女子の試合が始まる。この試合で、服部直子選手（体育4年）が21点を挙げ、続いて福士佳恵選手（体育4年）が28点を挙げるなど、インサイドからの攻撃が目立った。結果は76－54で筑波大が大差で勝利するも、アウトサイドからの点が取れなかった。また日体大の池谷選手に22点を奪われ、第三ピリオドでは勝ち越されるなど満足のいく試合内容とはいかなかったようだ。

この試合結果を踏まえ、筑波大女子バスケットボール部の大高敏弘監督はインタビューの中で、今後の戦略について、「最終的にはインサイドに頼るチームになるが、インサイドを活かすためにもアウトサイドを鍛えていく。」と試合を振り返った。昨年はインサイドとアウトサイドのバランスがとれていたが、今年はインサイドに偏っていることが心配される。しかし、日筑戦後に行われたGWの合宿ではバランスがよくなったということで、これからに十分期待できそうだ。

また、男子の試合でも、女子同様に日体大に93－58と大差をつけての勝利となった。第一ピリオドではファウルに苦戦するも、徐々に筑波が点差を広げる形となり勝利した。こちらは黒田幸太選手（体育4年）が14点、加納誠也選手（体育3年）と星野拓海選手（体育2年）がそれぞれ11点を挙げた。

今年は、ハーフタイムに日体大のダンスチームによるパフォーマンスが行われた。仮面をつけて身体全体で表現し、会場のバスケファンたちの視線をくぎ付けにしていた。またこのパフォーマンスによって観客の熱気も上がり、より一層バスケの試合を盛り上げるかたちとなった。

また、入場チケットによる抽選会も行われ、当選者には日筑定期戦のTシャツがプレゼントされるなど、観客も楽しんで参加できるイベントが用意されていた。

そしてなんといってもファンを喜ばせたのは、試合後に行われた筑波大、日体大双方の選手によるファンサービスだろう。選手たちは会場をぐるりと一周し、ファンからの握手やサインなどを求める声に応じた。つい先ほどまでコートで接戦を繰り広げていた選手を間近にしたファンの嬉しそうな表情がとても印象的だった。選手とのふれあいの時間を楽しんでいた。選手も実際にファンとふれあうことで、活力を与えられたことだろう。この企画を恒例の企画にすることで、日筑戦はこれからもより一層の盛り上がりを見せるかもしれない。

また後日行われた、第59回関東大学バスケットボール選手権大会では、男子は準決勝で日本大学に敗れ関東3位となった。女子は決勝戦で拓殖大学に敗れ惜しくも準優勝という結果となった。

女子バスケットボール部の大高監督からは、今年の抱負は、「秋のインカレで勝つこと」という頼もしい言葉も聞けた。今年もまた、バスケットボール部の活躍から目が離せない年となりそうだ。

（稲嶋ひろな）

春季スポーツ・デー 34th Sports Day

5月22・23日に、筑波大学陸上競技場を中心として、第34回春季スポーツ・デーが開催された。約六千人の参加者が集まり、大いに盛り上がった。

今年は、正式種目8種目（ソフトボール・ソフトバレーボール・バスケットボール・ドッジボール・ハンドボール・テニス・卓球・オリエンテーリング）の他、昨年に引き続き大運動会が企画された。綱引きや大縄、リレーなど、懐かしの種目が開催され、参加者は大いに楽しんでいる様子であった。2日目には、ミニサッカー、ミニバレー、ミニバスケの試合に参加し、勝敗によるポイント制で競い合う、スポッチャが新企画として開催された。生憎の雨により、午後以降中止となってしまったが、短時間に多くの参加者が参加しており、秋にもう一度開催してほしい企画である。

藤本真央スポーツ・デー局長は「ソフトボール混合ビギナーズ以外の種目では、決勝戦まで行うことが出来て良かった」と、参加者に多くの試合を楽しんでもらえたことを喜んでいる様子であった。また、「体操部のサークル企画を陸上競技場で行い、多くの参加者が集まった。今までに無い試みであったが、サークル企画にもっと参加者が集まるように、企画を充実させていきたい」と話した。秋は一層参加者を楽しませてくれそうだ。

また、スポーツ・デー学生委員会の田村優介委員長は「当日参加してくれた人が満足できるようなスポーツ・デーを企画したかった」と話してくれた。従来あった企画の充実を図り、結果的に、例年以上の賑わいを見せた。「秋も参加者に、存分に楽しんでもらえるように企画を考えたい。秋季スポーツ・デーは10月23・24日。みんなでスポデーに参加し、いい汗をかいてください！」と秋に向けて抱負も語ってくれた。

仲間とともに汗を流し、笑い合い、大学生活におけるかけがえのない思い出を作れるような企画を、秋も期待したい。（田村俊和）

DANCE EXPRESS

ゴールデンウィーク初日の5月1日、つくばカピオホールでダンス・エクスプレスvol.4が開催された。春の日差しが降り注ぐ中、同ホールは開演直前までウォームアップを続けるダンサーたちの、プロ顔負けの迫力と緊張感で覆われていた。

期待に胸を躍らせながら席に座っていると、ライトダウンと共に2人の陽気なピエロが現れた。彼らは客席を沸かせると、一気にダンスの世界へと誘った。

そこは、ダンス部による『Moulin Rouge』が始まると、その名の通り、赤い風車を思わせるノスタルジックな世界へと一変した。続いて、体操部による『UFO』。ピンクレディーの往年の名曲に乗ってバランスボールやフラフープ、ラートを使った軽快な動きは、体操部の貫録を漂わせていた。

今年も昨年に引き続き、学外のダンスクラブが参加した。中高生20人で活動するD-matsは生き生きとしたダンスを披露し、仲間からのエールが客席から飛び、若さ溢れる作品だった。他にも、ストリートダンスサークルのREAL JAMはヒップホップやジャズなど7種のダンスで観客を魅了し、YOSAKOIソーランを披露した斬桐舞は会場全体を盛り上げた。舞踏研究会による『ultra soul』は、ロックバンドB'zの曲に社交ダンスを合わせた作品で、まさに競技ダンスといった情熱を感じさせた。

今回参加した団体は、学内外合わせて6団体。それぞれジャンルの異なる作品で、見る者をそれぞれの世界に引き込んだ。それはまさに現実の世界から不思議の国へと導かれるような感覚で、開演からの約1時間があっという間に過ぎていった。

終演後、客席から聞こえてきたのは感嘆の声と意気込む声。「カッコ良かった」、「もう一度見たい」などと話す人がいれば、「俺もやってみようかな」と話す人もいて、皆それぞれ余韻に浸っていた。

一方、開演の傍らにはもう一人の主演者がいた。同ホールエントランスに設置されたbeacon(ビーコン)である。人の動きに合わせて音を奏でるユーモアに富んだ次世代型ともいえる楽器で、08年アジアデジタルアート大賞を受賞しており、来場者の注目を集めていた。

ますます広がるダンスの輪。今年で4度目の公演となるダンス・エクスプレスだが、今後どのような世界を創り出していくのか楽しみだ。

（萩尾奈緒香）

編集後記

春を通り越してすっかり暑くなりました！寧ろ最近は梅雨ですね。過ごしやすいとは言えないような気候ですが。今号も筑波スポーツを手に取っていただきありがとうございます！

さて、近年少数精鋭だった編集部も、今年は沢山の新入部員で編集室が溢れ返っています。こんな編集室は3年目にして初めてです！今年はこの人数を生かして、どんどん紙面をレベルアップさせていきたいですね。

今号も製作にあたって多くの方に協力していただきました。ありがとうございました。これからもご支援のほどよろしくお願いします。夏休みはスポーツイベント盛りだくさん！熱中症には気を付けながら楽しみましょう！

（斉藤千絵）

編集スタッフ
編集長　斉藤　千絵（比文3年）
主務　本間　詩織（体育3年）
有田　和晃（シス情1年）
板谷　悠人（シス情1年）
田村　俊和（シス情1年）
李　維悦（人社1年）
西邑　拓也（体育4年）
太田和　幸子（社会4年）
山川　晋弥（自然4年）
稲嶋　ひろな（社会3年）
住田　有希恵（体育3年）
萩尾　奈緒香（社会3年）
上杉　織美（日日2年）
小島　菜奈美（資源2年）
鵜川　香奈子（比文1年）
大庭　夏海（人文1年）
矢畑　冴佳（人文1年）

発行所/筑波大学体育会
（TEL.029-853-2589）
発行人/一杉 亮
編　集/筑波スポーツ編集部
責任者/斉藤 千絵（編集長）